

## 2002 年度「外国文学」講義録 (5)

——「私の歩み」ミシガン大学大学院コミュニケーション学部へ——

徳 座 晃 子

### はじめに

本稿は、「外国文学講義録」(3) V. 『エディパス王』と「後記—私の歩み」、『人文自然科学論集』No. 117, 2004 年, pp. 57-134, 〈徳座晃子退職記年号〉中, 129 頁で中断した〈(5) ミシガン大学大学院コミュニケーション学科へ〉の続きになる。(1)-(4) には, 以下の学位論文提出までの歩みに言及している。

#### 学位論文

- |            |  |
|------------|--|
| 1955 年 3 月 | 文学士 “John Donne: In His Steps” 慶応義塾大学  |
| 1961 年 8 月 | M. A. in English “Rhetoric in Greco-Roman Education” ミネソタ大学<br>大学院   |
| 1964 年 3 月 | 文学修士 “Ralph Waldo Emerson’s Theory of Arts” 慶応義塾大学<br>大学院  |
| 1988 年 8 月 | Ph. D. in Communication “Oku Mumeo and the Effects to Alter the<br>Status of Women in Japan from the Taishō Period to the Present” ミ<br>シガン大学大学院 |

- (1) 慶応義塾大学大学院文学研究科からミネソタ大学大学院英文学科へ
- (2) ミネソタ大学大学院スピーチ・演劇学科へ
- (3) 異文化社会への適応
- (4) ワシントン大学大学院スピーチ学科へ

本論にすすむ前に, 「(3) 異文化社会への適応」でこれまでによい思い出ばかりを並べたが, 日本人留学生として受けなくてはならない立場にあったエピソードを思い切って二つ述べておく。2002-2003 学年度に筆者担当の「外国文学」を履習した学生諸君は卒業しているので, 今回, はじめて読む人々は留学生の体験記として読んでくださればと考える。筆者の専攻は英米文学と修辞学であった。今回は, 次の項目で留学体験を述べる。

1. 古典修辞学から現代の「説得法」(Persuasion) へ  
古典修辞学 スミス先生, スコット先生, ボーマン先生, イノス先生, マーティン先生, コルバーン先生, Gentlemen Scholars
2. 説得法/術 (Persuasion) ベアード先生, コルバーン先生, ラッカムでの講演会 (全米コミュニケーション学会歴代会長の紹介), オキーフ先生夫妻
3. 社会学 チェスラー先生, 社会学と私
4. マーティン先生 社会改良運動のコミュニケーション
5. 博士資格試験
6. 忘れえぬ人びと

1956年12月7日ミネソタ大学英文科の講義三限目, 私は高齢・白髪のMiss Jacksonの“Milton”のクラス, 教室の真中に座っていた。英文科必須クラスだったので, かなり大きな教室で, 学部・院生30~40人が着席していた。教科書は大学街ディンキー・タウンのMcCosh Bookstoreで売ってしまったので現在手元になく, 題は記憶違いかもしれないが, 皆を見渡しながらか部厚い*Students Milton*の中の挽歌“Lycidas”(1637)を, はじめは, 男の老人のような, しわがれた低音で, ゆっくりと, 腹の底からうなりはじめられたー  
“Woe unto the men of the world!”そして, “Ten Years ago, today, as I was reading this line...”と, ゆっくり, はっきり, 老女の, 細い, するどい声で音幅広く抑揚をつけて, 真珠湾が攻撃された, とおっしゃった。日本人の私はたった一人, 困ってしまった。

もう一つはピカード家で起こった。1960年冬, 日米安保条約反対運動の真っ只中に米国政府要人が東京の大学へ講演にきた。それを阻止する学生デモのテレビ・ニュースを前日に見られたらしいピカード夫人が, 翌日早朝に学校に行こうとそーっと出て行こうとした私を追っていらして, 「Remember, Pearl Harbor! あの時のパイロットが着ていた軍服は, 関東大震災の時に私たちが賜ったテントからつくられたのですよ」と言われた。

この二つの経験以外には, 日本人留学生として当惑したことはない。私を育てぬいて下さった男性教授たちは, ご自分の軍役生活のことは, 誰一人自分から口にされたことはない。

このような教室内外での体験ののち, オコーナー先生の配慮で, 修辞学・演劇学科へと転科した。本校在籍の留学生諸氏も, さまざまな体験の思い出をたずさえて母国へ, 将来の生活へ, 向かわれるであろう。

1977年9月から, ミシガン大学大学院スピーチ学部に入學し, ミネソタ大学時代に取得した単位を活用して, 16年ぶりに博士コースの勉強に戻った。学部はすでに改称され(1980年) Mass Communication 学部を併合し, Communication 学部となっていた。

1960年代以降現在まで, 全米規模で研究分野/領域の細分化により, 学科・学部の合併,

名称変更も続いている。Speech and Theatre Arts 学科→Communication 学部や Speech Communication 学部, または Communication 学部。Speech 学科+Journalism/Mass Communication 学部→Communications 学部など。この流れの中で、ミネソタ大学でも、前項でご紹介した Scott 先生は、全米トップのミネソタ大学ジャーナリズム学部長を兼任された。現在その学部名称がどうなっているかについてはまだお聞きしていない。

研究、授業内容と学部名称激変のこの時代に、特に1970年代に、安定したポストを求めて、多くの(若手)学者たちはプロモーション、ディモーションのために全米をわたり歩く。

## 1. 古典修辞学から現代の「説得法」(Persuasion)へ

### 古典修辞学

スミス, スコット, ボーマン先生

前稿(「人文自然科学論集」, No. 117, 2004年, pp. 122-123)で述べたように、ミネソタ大学のスミス, スコット, ボーマン先生は、1961年冬、お別れの賜り物にと古典修辞学の伝統を示す三部作を下さった—Charles Sesrs Baldwin 著, 第一巻 *Ancient Rhetoric and Poetic* (261 p.), 第二巻 *Medieval Rhetoric and Poetic to 1400: Interpreted from Representative Works.* (321 p.), 第三巻 *Renaissance Literary Theory and Practice: Classicism in the Rhetoric and Poetic of Italy, France, and England 1440-1600*, edited with Introduction by Donald Lemen Clark (251 p.), (Peter Smith, 1959, 251 p.)。先生方からのこれら賜り物の本は、ゴルギアス(Gorgias), プラトン, アリストテレス, イソクラテス, クィンテリアン, キケロ, …キケロの再臨といわれる故ケネディ大統領, …と続く, 東西ヨーロッパ諸国で公の立場から人心を左右する役を効果的に演じるための, 話しことば・書きことばや身体表現の, 達人養成の歴史書のようなものである。その中の一冊は『雄弁/弁論術』(QUINTILIAN ON THE TEACHING OF RHETORIC, DE INSTITUTIONE ORATORIA)で, 以下に, 社会の指導者に成らせるために, 当時修辞学校に通わされていた若者たちに力説した要点的二・三を, 現在の私のことばであげてみる (Baldwin, 第一巻, pp. 64-65)。

人は何の目的で話し書くのか?

1. To inform (*docere*) 情報を伝えるため。
2. To win sympathy (*conciliare, delectare*) 自分の価値観を伝えるため, 相

手を善悪にみちびくため。現在では、to instruct。

3. To move (*movere*) 感動させる—よろこびや悲しみを与えるため。現在では to please, to entertain ともいう。

#### 上記の目的を十分に達成するためのことばの使い方は？

1. Investigation (*inventio*) 述べたいこと (論旨/主旨) を活かすのにふさわしい諸例を集めること。
2. Plan (*dispositio*) 論旨の展開 (起承転結) にふさわしいように、上記の諸例の配列を考えること。
3. Style (*elocutio*) 上記を実際を書いてみる。
4. Memory (*memoria*) 一番よいと考えるまで何度も書き直す。
5. Delivery (*pronuntiatio, actio*) 声, 身体表現などでその所信を発表する。

ミネソタ大学で、このような古典修辞学の手ほどきを受け、ミシガン大学では Richard Leo Enos 先生と Howard H. Martin 先生から更に詳しい教えを受けた。

### イノス先生

ミシガン大学での私の advisor は、はじめ Dr. Richard Leo Enos で、インディアナ大学大学院 (1973, Ph. D.), イタリア系アメリカ人。30 歳代はじめてであろうか? 若い夫人はミネソタ州生まれ、ミシガン大学法学部を卒業して間もない弁護士だった。先生にとって、私が最後の Speech 学部 advisee であった。1979 年 8 月博士資格筆記試験を終えて、その足で、先生の研究室に伺うと、お引越しの最中だった。オハイオ州ピッツバーグにある Carnegie Mellon 大学英文学科に移られた。それからテキサスの大学へと、更に移られた。

イノス先生がスピーチ学部から英文学科の先生になられても、お教えになる内容はかわらない。前述のように、『詩学』と『修辞学』は相関関係にある。“The other side of the same coin” である。

イノス先生の授業では *Rhetoric in Greco-Roman Education* by Donald Lemen Clark (Columbia University Press, 1957, 285 p.) を、まず一学期間聴いた。聴き手・読み手をこちらの立場にことばを用いて引き入れ/説得し、相手にこれまでの態度の変化 (attitude change) を起こさせるためには、自分は

*logos* ロゴス (理性に基づく/訴える 考え方やことばの用い方),  
*pathos* パトス (感性に基づく/訴える 考え方やことばの用い方),

*ethos* エトス (徳性／ふさわしさ 考え方やことばの用い方)  
をみがなくてはならない (education of the rhetor/speaker/writer)。これは、ミネソタ大学の先生方からすでに学んでいた。

古典修辞学分野のもろもろの授業のエッセンスはこのようなものであった。

このように、スコット先生から、かつて教えられた同じ範疇の分野—古典ギリシャ・ローマ時代、中世、近世、現代の修辞学—をミシガン大学でイノス先生と共に学んだ。それに加えて Kenneth Burke (バーク), Chaim Perelman (パールマン), L. Olbrechts' Tyteca (タイテッカ), Stephen Toulmin (トールマン), Marshall McLuhan (マクルーハン) 等々の諸理論を教えていただいた。教科書の一つ Richard L. Johannesen. *Contemporary Theories of Rhetoric: Selected Readings*. (Harper & Row, 1971, 403 p.) も私の第三のバイブルとなった。

イノス先生の母上はイタリア、トリノのご出身らしい。私が一人でアテネ郊外のデルファイの神殿跡をたづねたとき、Enos の名がデザインされている絵はがきを見つけ、おみやげにと先生にお贈りした。

それから数年後、スコット先生をおたづねしたときに、イノスという人がレトリックの本を出しているが、彼の娘さんかとおたづねになった。偶然だが、私の本棚に編者として Theresa Enos and Stuart C. Brown の *Defining New Rhetoric*, (Sage Series in Written Communication. 1993, Vol. 7, 265 p.) がある。多分そうかもしれない。1994年の夏 ピッツバーグのお宅に短時間立ち寄った際に、近著にサインして下さった。

*GREEK RHETORIC BEFORE ARISTOTLE* by Richard Leo Enos. (Waveland, 19\_\_ , \_\_ p.) ;

To Akiko—

With much appreciation

for our many years of friendships.

サイン

9/10/94

当時、幼児から小学校上級ぐらいまでの男・女数名の養子がいた。短時間のよもやま話の中で、今からおよそ5000年前に書かれた『旧約聖書』の英訳が出版されたとおしえて下さっ

た。帰路本屋で入手し、牧師をしている私の兄へのおみやげにした。現在自分の書棚からみつけられないが、イノス先生は、アリストテレスの詩学・修辞学の理論がイスラム世界にどのように伝わっていき、それがルネッサンスというかたちでイスタンブールを越えてどのように東・西ヨーロッパに伝わっていったかがわかる本を、大学街の本屋で指して教えて下さった。

### 古典修辞学／弁論法

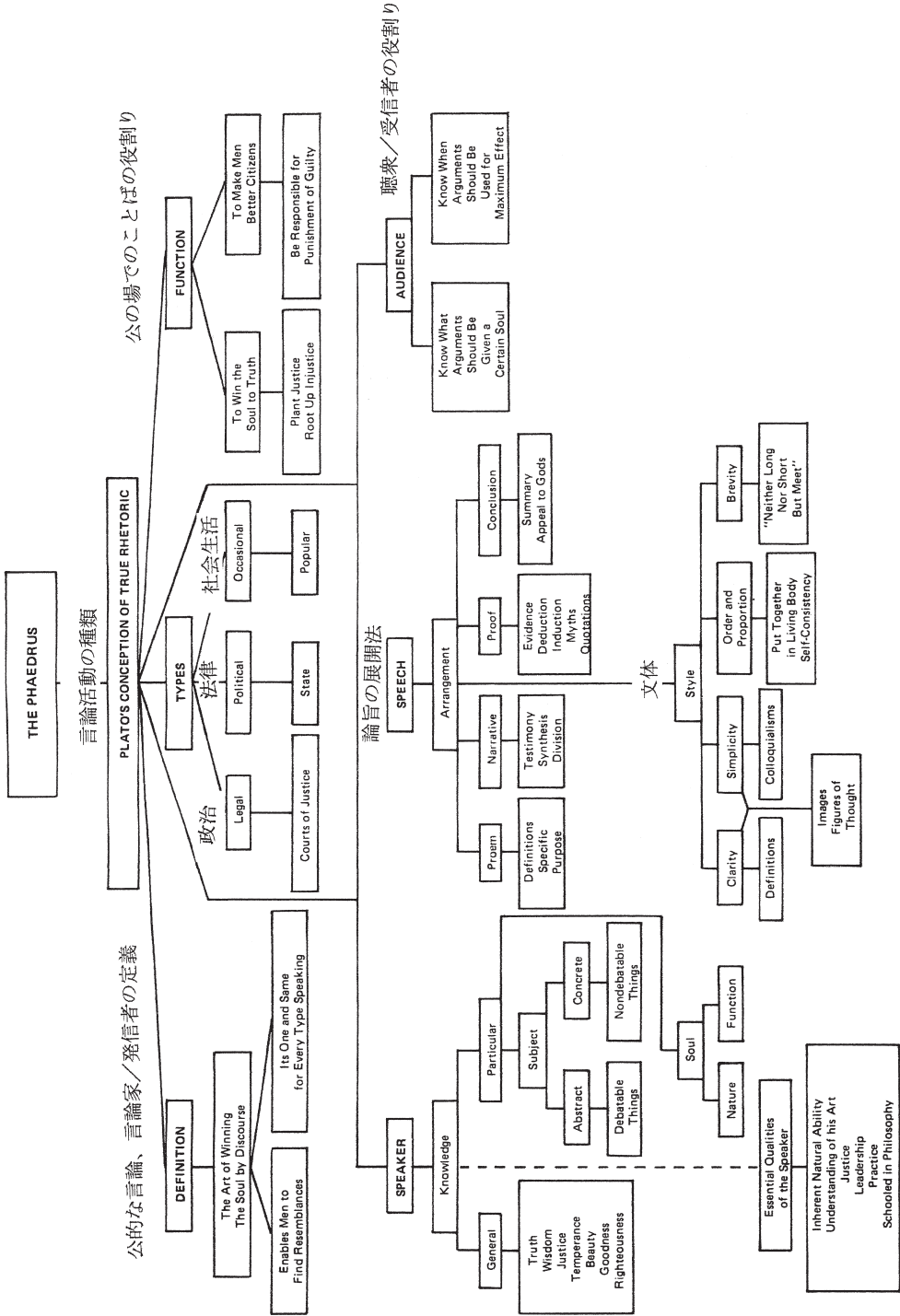
もう一冊の私のバイブルは、自分で見つけた—*The Rhetoric of Western Thought* by James L. Goldman, Goodwin F. Berquist and William E. Coldman, (Kendall/Hunt, 1976, 256 p.)。その本で私の学生に、年齢を問わず、いつもプリント二枚を配っている。プラトンの『フェードラ』(*The Phadras*) とアリストテレスの *The Rhetoric* がそれぞれ一頁に図解してあるもので、そこには、古代ギリシャ時代の人間生活を支配する/させる政治、法律、社会文化生活上のことばの使い方が縮刷してある。例えば“Happiness” とは何をさすのかなど。これをみて、東西欧州諸国の人々の「善」とか「Happiness の追求」がはじめて具体的にわかる気がする。(以下の表をご参考, pp. 29, 36,)

政治に関する言論活動は、“Happiness” を扱う。Happiness とは、アリストテレスの『修辞学／弁論法』の表、左上を拡大したものが、その内容。

### マーティン先生

アメリカの大学での古典修辞学の伝統に関する勉強の中で、いまだに答えていない宿題が一つある。イノス先生が去られてから、ウイコンシン大学ミルウォーキー校の教授(工学関係?)のご子息で、シカゴの郊外にあるノースウェスタン大学(Ph. D. 1955)の Dr. Howard H. Martin 先生が、私の第二の advisor になられた。その先生が、修辞学史関連の話題の中で課された未完の宿題である。「社会改良運動のコミュニケーション」の授業中、何かの関連で二度も口にされた質問である。先生ご自身にとっても、未完の宿題かもしれない。カスティリオーネ(Baldassarre Castiglione, 1478-1529) 著『宮廷人』(*Il Cartegiano*, 1528) である。「この作品の中にあらわれている説得(persuasion)の段階を調べなさい」である。(『カスティリオーネ宮廷人』東海大学古典叢書、清水純一、岩倉具忠、天野 恵訳注、東海大学出版会、1987, 938 p.)

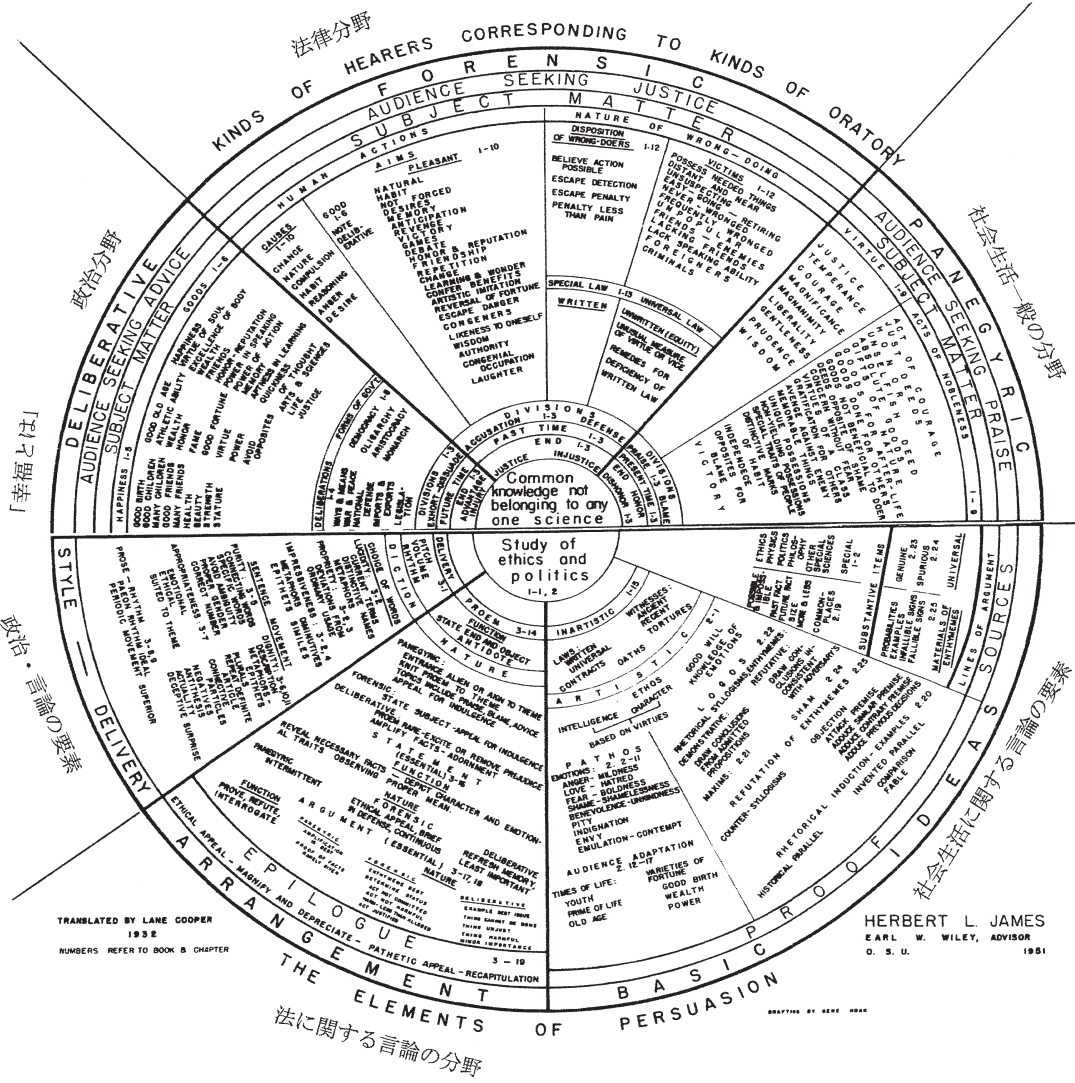
プラトンの「言論／ことば」を論じた『フェーデルラ』



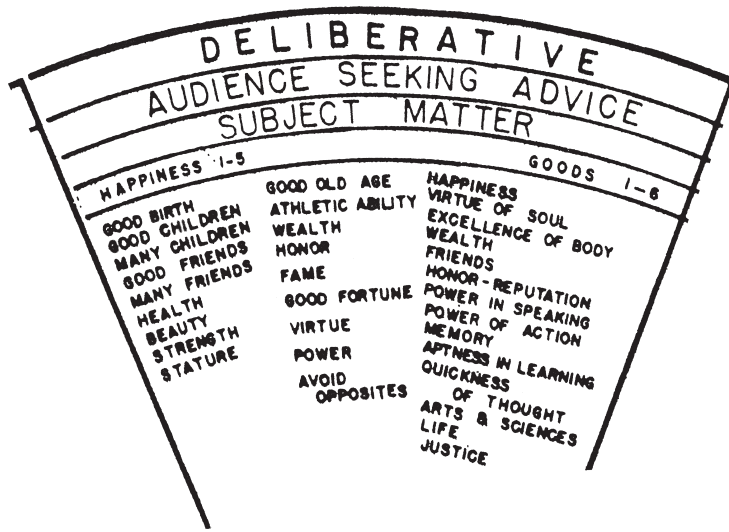
In 1951, Professor Herbert James of Dartmouth College, then a graduate student at Ohio State University, constructed the following model of the *Rhetoric*. We include it here as an excellent summary of the major components of Aristotle's theory of persuasive discourse.

# The RHETORIC OF ARISTOTLE

Rhetoric is the counterpart of dialectic (1-1). Rhetoric is the faculty of discovering in the particular case all the available means of persuasion (1-2). The functions of rhetoric are to make truth prevail, to instruct, to debate, and to defend, (1-1).







コルバーン先生

1978年秋、伝統的修辞学の訓練が特に必要とされる政治・法律分野の指導の一翼を荷ったのは、討論法担当のC. William Colburn先生であった。ご著者 *Strategies for Educational Debate* (Holbrook Press, 1972, 278 p.) を使った。二派に分かれ、ある問題について、一定の時間内に、反対か賛成かの態度を表明する。このためには整然と論旨を展開させなくてはならない。その起承転結を支えるために、十分な諸例を集めておかななくてはならない。一人では出来にくいので、2・3人のパートナーと組む。チーム・ワークのよしあしが、議論に勝つかどうかを決めるほど大切である。それ故に、ディベートを gentlemen's game ともいう。はじめ賛成論をした人/グループは、次に反対論をする。このように、同一学生は双方の立場の準備に強くなる。正に educational debate の授業であった。

論旨の展開や例の集め方・配列の仕方などは、訓練を重ねれば一人で行える。結果は質の高い public speech/public speaking, 評論 (essay, criticism) である。ミネソタ大学時代、スコット先生は、議論がなされる代表的本場、国会上・下両院で実際になされた debates の記録 *The Congressional Digests* を学生に使わせていらした。ミシガン大学では、法学部、経済・経営学部、夏学期期間には公務員や中・高の先生方が出席していらした。

コルバーン先生はこれらの学生や社会人に企業組織論も担当なさった。

### Gentlemen Scholars

思い出すのは、すでに紹介したワシントン大学の学部長、Horace G. Rahskopf 教授で、

1950 年全米の Speech Communication Association (1915 年創立) の会長をした方である。ご退職近い年齢でいらした。冬の夕方、お家に大学院生を招いて下さり、白髪の夫人と共に 2・3 時間談笑した。背は高く、姿勢がよく、黒に近いスーツをいつもお着けになり、質実剛健、教育上の西部開拓魂をもった方だった。授業中のお姿は、終始正式な演説法の模範を示すものであった。後に、ミシガン大学でもそのような高齢の先生が一人おいでになった。いわゆる Elocution Movement 隆盛期の若者だったのであろう。

ミネソタ大学でも 1950 年代半ば、ロゴス、パトス、エトスの備わった教授たちを、大教室の最前列に座って、非公式聴講生として拝顔した。

1958 年, Ford Hall, 政治学, 長身, 堂々たる体格, 真夏でもスーツを召した前外交官マックローリン教授。腕ぐみをして授業第一声, “Personal diplomacy is dead.” と, 凜と発せられた。先生が大学教育を受けられた戦前とくらべ, 全面的にいくぶんゆるやかになった教育を家庭・学校で受けてきた我々学生を励ますおつもりの声・ジェスチャーだったらしい。お隣りのジャーナリズム学科専用の建物内でも非公式に聴講していた。ご同年輩の堂々たる体格のカーター, フォード, *The Press and America* の著名なエメリー, 少し小柄だが *Social Responsibility of the Press* のジェラルド教授—みな superb orators/persuaders であった。“Pleasant voice” (パトス, 1950 年代は男性は低い声), 語の選択 (diction), 正しい文法や整然とした論旨の展開 (ロゴス), 教壇での姿からにじみ出る品位 (パトス・エトス) が受講者たちを魅入らす。1960 年代はじめ, 突然 26 歳の長身, ジョンソン教授が学部長に選ばれたが, この方はどのようなロゴス, パトス, エトスの力で, ジャーナリズム科学生たちに感銘を与え得たか?

非公式に出席した講座に, もう一人, ロシアから亡命してきたときく老人のようにみえる教授が歴史学科におられ, 1950 年代の日本の大学では聴けない東ヨーロッパ諸国の歴史を講義されていた。

その人は東欧史担当のアレキサンダー先生でコザック隊関係云々ときいた。スイス系アメリカ人ピカード教授 (既出) と同様に, 外国語なまりの強烈な音声英語には閉口したが, 単語の選択 (diction) や文法の正しさには感服した。教壇での姿などからにじみでる品位 (エトス・パトス) が受講生たちを魅入らした。講義中に連発なさる “ladies and gentlemen” は耳障りであった。老齢のせいかわ, 戦後, ご渡米前の東欧でのご生活のためか, 教壇上の姿勢は, 前こごみで, いくぶんお気のどくに感じた (パトス)。毎回の 60 分講義全体を通して, 整然とした論旨の展開 (起承転結) がなく, ただただ自然に流す, いわゆる spontaneous speech であった。そのためか, 他の正統派大教

授たちとちがって、親しみがもて、お家にまで押しかけてコーヒーをいただいた。

一方、アメリカ育ちの大先生がたの毎回の60分講義中に展開される整然たる論旨（ロゴス）には敬服した。

英文科のオコーナー先生は長身、大柄、上記の先生方同様礼儀正しすぎるほどの紳士。私のような体の小さい、若い者がお部屋に入っていくと、いつもの椅子から立ってむかえて下さる。スピーチ学科のスミス先生も同様。晩年心臓を三回手術なさったあとで、ウイコンシン大学副学部長室でお目にかかった時でも、やさしさと高い品位（エトス）を保って接して下さった。これらの先生方は、第二次世界大戦後の世相の中でも、アメリカ中西部マンモス大学に在っても、教育者として輝いておいでだった。

23歳の私をこのような gentlemen scholar たちの世界に送り出した父は、今思えば、なかなか立派な心構えを持っていた。1956年の8月、留学出発一週間前に、外務省式典課出版の『外交とエチケット』を読むようにと手渡した。すぐに目を通して返すと、「ここを暗記したか」と、偉い人に英語で呼びかける敬称リスト数頁を指して、私にきいた。“Ladies and gentlemen,”からはじめて、高位高官の人への呼称などを暗記しながら、父の期待の高さを感じた。出発当日、横浜港まで見送りに来てくださった父の親友・農民文学者丸山義二氏が、東に向かって飛ぶ一匹のトンボを画いた色紙を、父は山口県の実家で大切に使用していたらしい小さな玉露茶碗を五ツを、出航寸前に船室のテーブルに置いて去っていった。以後、お茶、お米から歯みがき用具まで、何年も後方支援が続く。後年、原稿締切日は守ること、親の死の枕元でも書くこと、これが氏の私への助言であった。アメリカの大学でのレポート締切期限も実にきびしい。ご子息丸山工作君も大学の先生になられ、本の出版をなさり、そして、学長や日本中の大学にかかわる入試センターの長になられた。トレード・マークは笑顔だったと2004年1月13日の全国版新聞の「惜別」欄に載っていた。磨き上げられたロゴス・パトス・エトスの最高位まで昇られたのであろう。

東京経済大学コミュニケーション学部学部長だった板垣雄三先生や、余部福三先生、神保規一先生とそのような話題でお話する機会がなくなってしまった。

## 2. 説得法/術 (Persuasion)

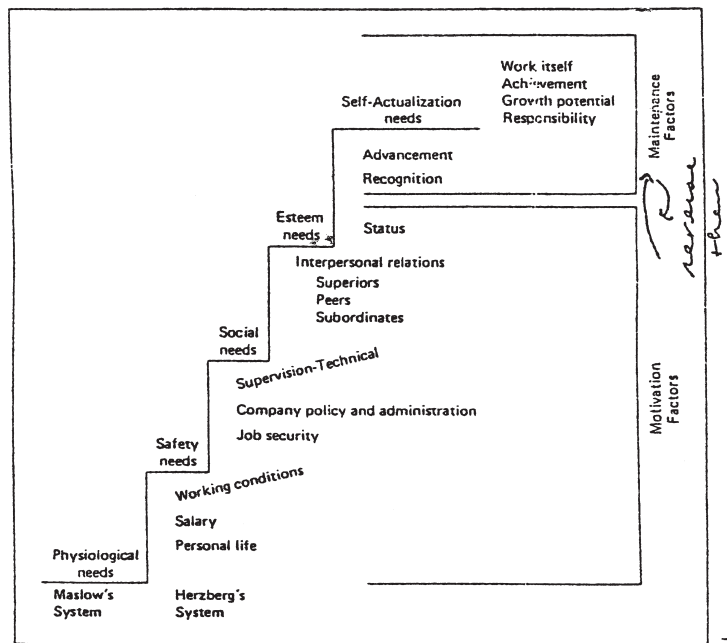
### ベアード先生

1950年代の中頃から、“Rhetoric/Speech”を“Persuasion”（説得/説得法/説得術）と置

き換えて表現するようになっていた。マーティン先生と同年に、イリノイ大学で Ph. D. をとっておいでのスコット先生から、ミネソタ大学ですでに習った Vance Paccard の *Hidden Persuader* (『隠れた説得者』一邦訳あり) のタイトルが示すように、“persuasion” とは、相手/きき手/読み手を心理的に上手に己の立場にひきこむための、ことばや、その他様々な手段の使い方であるという意味の表現形式になってきた。

Abraham Maslow の「マズローの法則」(The Maslow System, 1943, 1954) によると、人々の日常生活行動を観察すると、人間は欲求解消 (drive reduction) のために基本的に 5 段階の行動をとる。政治・経済・社会・文化生活分野のリーダーたちは、この傾向をうまく利/活用して、自分(たち)に有利なように行動操作・説得をすればよい。

相手が 1 人 (対人) でも、3~6 人 (小グループ) でも、30 人ぐらい (グループ) でも、それ以上の特定多数 (オーガニゼーション 組織体), 無数 (マス/大衆) であっても、結果として改悪となっても、人/人々を現状から変える/動かすための説得法 (persuasion) である。



The Maslow and Herzberg Systems Compared  
マズローの法則 (The Maslow System), (Baird, p. 90)

この心理分析と操作が、政治・経済・社会・文化、日常生活全面で猛威をふるいはじめた第二次世界大戦後に生まれた若手学者たちの一人、John E. Baird, Jr. 先生に、ミシガン大学到着直後の 1977 年秋、週二回接し得た。父君もこの分野の学者だときいた。みずみずしい若さしたたる、清楚なスーツ姿のこの先生は、出版したばかりの博士論文らしい教科書を指定し、近辺の他大学から足を運んで毎回前列に陣どる、ういういしい数人の女子大学院生に

見あげられながら、一学期間ご自分の本の説明をなさった。教職では生活できないと、世界規模の医療機器販売会社に転職し、我々から去られた。残念だったが、氏の著書は、これまた私のバイブルとなって、東経大の学生諸君に教えまくった次第である。先生からはじめて耳にした「シナジィ synergy」という語も、最近の日本ではもう耳にしない。

力を合わせてよい結果を出すことは、古来から、日本人の社会生活の基本であり、当たりまえなことだからかもしれない。以下が授業で使用した氏の著書である。

*Communication The essence of group synergy* by John

E. Baird, Jr. and Sanford B. Weinberg. (Dubuque, Iowa: WM. C. BROWN CO., 1977), 273 p.

*THE DYNAMICS OF ORGANIZATIONAL COMMUNICATION* by John

E. Baird, Jr. (N.Y.: HARPER & ROW, 1977), 333 p.

ベアード先生が去られたあと、1978年夏期前・後学期には、10数歳(?)年上のコルバーン先生が Organizational Communication の授業を継がれ、ここでもまた女子学生、社会人たちの顔々が並んだ。

### コルバーン先生

1978年夏は、先生にとってとりわけ多忙な時期であったろう。思い出せないが、ミシガン州あるいはキャンパス所在地アン・アーバーの議員選挙の月で、先生は立候補なさった。我々大学院生は、ご自宅に、街に、お手伝いに歩きまわった。先生は、当時40歳代のはじめくらい。それ以後数年ほど卒業生担当部 Alumin Association の部長をつとめられたのち、東部の大学に移られた。ご出身は中西部らしい。ミシガン大学アメリカン・フットボール部の顧問をしていらした。堂々たる体格で、エトス満々であった。

1979年3月、先生は私の博士資格審査の筆記・口頭試験の労をとって下さった。“*Inventio* とは何か” が質問であった。古典修辞学の基本である5つの canon の一つ、ある特定のトピックについての例の集め方である。いつもとはちがう、きびしい顔つきであった。

ご参考までに附言すると、博士学位資格筆記試験は、指定日午前8時から午後5時まで、一室にタイプライターだけを持ちこんで、たった一人で閉じこめられた。履修した講座すべてについて、各担当教授の質問用紙が机上に置いてある。一人二問ずつと記憶している。その質問が、あまりにもきれいな英語表現で書かれている。日常生活でも講義でも、耳にしたことも目にしたこともない優雅な英文なので、何をきかれているのかわからないくらいであ

る。どのように解答しても博士号をもらおうとする解答者のプライドを傷つけないようにとの配慮からの、ていねいな婉曲表現なのだろうか？ 覚えていることを総て一時間余りでタイプし終った。それ以上書けない。学部長に帰宅してよろしいかととききに行くと、夕方5時までそこに居なさいと言われた。社会構造、文化がちがうところでは、応用力が不足する。考えて答えることはしにくい。ずっと後に、日本の大学での試験監督中、すぐにペンを置いて、正座しつづけている青年を毎年数人みた。やはり留学生たちであった。

文体のおはなしのついでだが、純文学を教えたり書いたりしていないので、「形容詞」はあまり使わない。ましてや社会科学系の論文などは、形容詞の使用はできるだけさけるようにとコルバーン先生に習った。(博士資格試験については後述する。)

## ラッカムでの講演会とブラウン・バッグ・ランチョン

### ラッカムでの講演会

1978年の夏には、私たちスピーチ学、マス・コミュニケーション学科の大学院生にとって、意義深い催しがあった。大学院の事務担当諸室や催しが行われる建物をラッカム(Rackham)とよぶ。そこに、これまでにご紹介した先生方や著者たちが勢揃いして私たちに講演して下さった。50歳代後半の中西部の大学出身者又は教授たちが多く、いわば彼等の同窓会のようなものである。例えば、アイオワ大学から、1968年全米Speech Communication Association(SCA)会長Dr. Douglas Ehninger。イリノイ大学でスコット先生の師ときいたDr. Marie Hochmuth Nichols(*Rhetoric and Criticism*, (Louisiana State University Press, 1963, 151 p.)の著者、1969年SCA会長。イリノイ大学出身、マサチューセッツ大学教授、1978年SCA会長のJane Blankenshipと夫君。テンプル大学からは、*Persuasion: Understanding, Practice, and Analysis*, (Addison-Wesley, 1976, 382 p.)の著者Dr. Herbert W. Simons—マーティン先生宅に泊まっておいでだったので、我々は先生宅でも夕方のパーティで個人的にお話できた。

そこで、15年後に発行された1993年SCA会員名簿を見た。創立(1915)以来78年間に会長を出した大学は、多い順にウィスコンシン大学(7名)、ノースウエスタン大学(7)、イリノイ大学(6)、アイオワ大学(5)、ミネソタ大学(3)、コーネル大学(3)、となっていた。現在でも、これらの大学出身者たちが、コミュニケーション学の主導権をとっておいでなのではないか。本校「コミュニケーション科学」第一号(1994)に載せたSCA活動の紹介をより詳しく分析すれば、これら中西部の大学が果しつづけている貢献の跡をたどることができ、今後日本からの若手研究者たちに参考になるのではないか。("An Annotated Bibliography

on Speech Communication: Historical Development, Current Status, and Directions for the Future, 1994, pp. 85-114”)

### ブラウン・バッグ・ランチョン

前項でふれたミネソタ大学大学院での Brown Bag と同様の催しで、各学期に一度、昼休みを利用して、空いた教室に出席者各人が手製のお弁当（サンドイッチ、くだものーリングかオレンジ、クッキー）を、しっかりした茶色の紙袋に入れて持参する。そして約30分～40分に2人ほどの大学院生の研究発表を聴く。司会者は先生。ミネソタ大学の場合、発表者は博士コース上級、出席者は大学院生たち、ミシガンでは、院生1人か2人、出席者は、もともと少ない院生たち全員（10人以下）、あとは小教室全部を埋めるほど多くの（30人～40人？）現・退職教授たち。開・閉会前後の室内や廊下は、音、動き、豊かな雰囲気溢れかえっている。

私は、うらやましいと、今でも思っている。

### オキーフ先生夫妻

講演会の当日の顔ぶれを思い出す努力をしてみても、出・欠どちらだったのか、通常の行動から推測して欠席だったであろう二人の若手先生がスピーチ／コミュニケーション学科に専任としていらっしまった。院生と年齢はあまりかわらない。筆頭は、Barbara J. O'keefe（イリノイ大学、1976 Ph. D.）、夫君は Daniel J. O'keefe（同）。ミシガン大学に就職したので、attitude change studies 関係の授業を担当。二人のゼミは遠い自宅アパートで毎週一回、夜開かれる。真暗な大空の下を、原野を30～40分走る級友ジョージ・マードックの大型 van に相乗りして参上する。何を言っておいでなのか、院生みなわからず、狭いアパートの台所のそばの椅子の上で、少年のように絶えず体を動かしたり、立ったり、座ったりしている先生を、好奇心で眺めるばかりである。女の先生や女性院生たちは、彼の母親代りのような暖かさで聴いている。このお二人の若い先生方と同世代の院生たちは、まづ日夜親しいお友達になることから始めていた。マードックや私は、終始、観察係り。この社会心理学的授業には、学部生たちにまじって、Eastern Michigan 大学の男・女学生たち数人も必ず出席していた。流行しはじめた分野なので、男のオキーフ先生は何を言っておいでなのか聴き手は、ちんぷんかんぷんの感があり、試験は前年度履修者へ返却された答案を丸暗記して、前年の図についている（+）印を（-）印にし、（-）を（+）にして皆こぞって提出した。いつも反対のことを答えておくとよいとのうわさにしたがって。これが面白かったが、何を教えた

いのかわからずじまいである。

昼間の授業に出ていた 40 代らしい沖縄からの帰還兵で映画制作志望の、小柄、やせ肩、それでいてダリ風の口ひげをピンとはやしたジェリー・サルバジオや、兵士として家族づれで日本駐留期間が長かった、私と同年輩の、地元出身者 George Murdok は、少年のようなオキーフ先生にややとまどっていたらしいが、みんな、単位はもらえた。お二人はご自分の学校イリノイ大学 Speech Communication 学科の専任になられたご様子だが、よく勤まっておいでだろうか？ ずっと後になって、戦時中、交換船に乗って帰国せずに、コーネル大学に留まって勉強を続けられた南博先生の分野のことを喋りまくっていらしたのだと思うに至った。当時使用した最先端の立派な装丁の教科書数冊は、私の本棚に今もどっしりと座している。

マードック氏は卒業時にサイモンズ先生著の前述の本を私にくれた。どうやらマーティン先生からもらった本らしく、先生のサインを消して、自分の名で私宛の以下の献辞が大文字小文字混ぜて書いてある――

To Akiko Tokuzo

With Respect and admiration

From George Murdok

July 31, 1979

大男の彼はミシガン州生まれ、牧師の息子ときいた。専門分野はオーラル・インタープリテーション（文学作品の音読法）。Speech Mass Communication, Journalism 学科が在る C. C. Fries Building 内の True Blood Theatre のステージに数人並んで詩の朗読をして間もなく、マードック氏は Western Michigan 大学の先生になったときいた。

### 3. 社会学

#### チェスラー先生

ラッカムの講演会に集まった Great Plains 出の心身共に堂々たる先生たちに加えて、当時、時と場を同じにすることはできなかったが、もう一人、私には同様の重さを持つ先生がいらっしやった。社会学部の Mark A. Chesler 教授である。私より 4 歳年下、コーネル大学、ミシガン大学（社会心理学 Ph. D.）出身である。のちに、私の博士資格審査のための面接にも立ち会ってくださっている。45 歳で大学生活に戻った時は、ベトナム戦争後の全米



で、社会変革の気運が沸きかえていた。私は、スピーチ学、社会学の講座一覧カタログの中で見つけた Mark A. Chesler 先生の “Research Methods Useful in Social Change Efforts”, マーティン先生の “American Public Address” と “Rhetoric of Social Controversy” 講座へ真直ぐに入っていった。学友たちも、先生や私の年齢に近い、小・中・高等学校の教師、公務員、ソーシャル・ワーカーたちで、20歳代の学生たちよりも多かった。この人たちと共に集い、私の子供時代からの関心事のバランスが、やっとなれたわけである。その安堵感を、コミュニケーションの諸形態と社会変革の関係をきわめるための基礎資料の紹介として、以下に発表させていただいた。「ミシガン大学社会学部における“社会変革”の講座に出席して」、1980、東京経済大学、『人文自然科学論集』第56号、pp. 339-375。

### 社会学と私

ミシガン大学大学院で社会学を副専攻に選んだのは、二人の母（実母と伯母—母の姉）の真似をしたようなわけである。

産みの母は現在95歳。京都西陣生まれ。寺の前の自宅二階、ミレー作の麦畑での夕べの祈りの額をかけた部屋で、女学校時代を通してキリスト教の日曜学校を姉とひらいていた。今でも『新・旧約聖書』のことばを暗記している。米騒動の頃は、父親が寺の境内でこめの炊き出しをしていたときいている。同志社大学文部神学科社会福祉専攻第一号。「キリスト教倫理と社会的実践」が卒業論文であったらしい。その前に、同志社女子専門学校英文科を卒業している。小学校生の私に、「ヘブライイズムとヘレニズム」、カーライル (Thomas Carlyle) と、ラスキン (John Ruskin) の『胡麻と百合』 (*Sesame and Lilies*) を今勉強しているのよ、とおしえてくれたり、『マッチ売りの少女』や『少年少女世界名作選』のシリーズをくれたり、西洋名画、とりわけラファエロやダヴィンチの絵はがきをくれたりした。私が3歳の時に父が病死したので、東京在の母の姉、私の伯母のところで住むようになった。

伯母も、娘時代から婦人運動の必要に目覚めていた。実家の周辺の「西陣のお針子さん」たちを自宅に集め、「ホワイト・ローズ団」を結成したり、厨川文夫先生の母君たちの“PL会” (?) にも顔をだしていた。これは、マーティン先生の「社会改良運動の型 (Types of Social Movements) の表、うえから4番目、educational type にあたる。両親の大反対を押し切って、山口県岩国生まれの牧師と、いわゆる自由結婚をした。大へん進歩的な女性であった。

このような私の「二人の母」は、毎年夏休みには京都の祖父母のところに私を連れていくと、羽仁もと子さん提唱の友の会や、同志社大学の先生方のお家に連れていった。琵琶湖のほとりで、当時最新の「メンタル・テスト」の研究家のところに連れていかれたことも覚え

ている。

東京では、当時としてはごくわずかの家庭で「パパ、ママ」を使っていたが、戦争中も、私は叔父伯母をそう呼ばされていた。伯母は、市川房枝さんを中心とした婦人の政治啓蒙運動と、賀川豊彦先生たちの提唱する消費者運動に熱心に参加していた。同志社大学の夏休みには東京で母がこれに加わり、私の「二人の母」は、「キンダー・ブック」を私に持たせて、いろいろな活動にひっぱっていった。四ッ谷見附の東洋経済新報社の一室を借りての婦人問題研究会に小学生の私を連れていき、山高(金子)しげりさんや神近市子さんたちのお話を聴いたり、啓蒙用紙芝居を観たりした。終戦直後、私の中学時代には、南新宿の空爆焼け跡にポツンと建てられた婦選会館(現在の名称)で、竹内しげ代さん、藤田たきさん、コロンビア大学帰りの大月照代さんたちの言動を見聞した。

世田谷区八幡山の北端、南高井戸の大西伍一氏宅の近くでひらかれていた農民自治会の例会で、「ハブロック・エリス (Henry Havelock Ellis, 1859-1939 イギリス人) のところで書生をしていた」「フランス帰り」の石川三四郎氏の苦境を知り、八幡山に居をおみつけたのも私の「母」である。ご葬儀には、その家の前の畦で道で諏訪根自子氏がヴァイオリンを弾いて見送られたとの便りを、ミネアポリスで私は受けた。「母」のアルバムの一つは、「新しき女」の旗の色(えんじ)のカバーで、その中のやや大型の一枚の写真には、「大木篤夫夫人、生田花世、野村孝子、平塚らいてう、城 しづか、白石清子、神谷静子、川井氏、宮山房子、私、(鍵田 貞)、住井すゑ子、近代婦人の集まり、1933年六月十八日」とある。私が1歳の時であった。父は同志社法学部・民法、田畑 忍・憲法、中島 重・国際法、の三羽鳥。3歳から、八幡山で晴耕雨読の生活をしていた農民文学者鍵田研一(養子名 徳座)に育てられた。

#### 4. マーティン先生

##### 社会改良運動のコミュニケーション

前稿(「人文自然科学論集」No. 117, 2004年, p. 129)でお伝えしたように、マーティン先生から「アメリカ言論史」や「社会改良運動の言論」をはじめ、大学院のコースほとんど全部の講義を受けた。すでに30年ほどの年月が経っているが、お推めになった数多くの教科書は、現在の日・米のコミュニケーション研究分野の理論上の基礎となり得る。その例を何冊かお示しする。

Martin, Howard H. and Kenneth E. Andersen. *Speech Communication* →→→ *Analysis*

*and Readings*. (Allyn And Bacon, Inc. : Boston), 1969, 355p.

1. 国際コミュニケーション分野で使用または紹介された教科書の例

Klineberg, Otto. *The Human Dimension in International Relations*. (Holt, Rinehart and Winston), 1964, 173 p.

Fischer, Erika J. and Dorothy J. Merrill. *International & Intercultural Communication*. (Hastings House Publishers), 1976, 524 p.

2. マス・コミュニケーション分野

Gipe, George A, *Nearer to the Dust*. (The Williams & Wilkins Co.), 1967, 290 p. (これは、先生の研究室の前に「どなたでもお取りください」とレッテルが貼ってある箱の中からいただいた。)

Rivers, William L, Theodore Peterson and Jay W. Jensen. *The Mass Media and Modern Society*. (Rinehart Press), 1971, 342 p.

Voelker, Francis. and Ludmila A. Voelker. *MASS MEDIA [—] FORCES IN OUR SOCIETY*. (Harcourt Brace Jovanovich, Inc.), 1972, 431 p.

Chester, Giraud, Garnet R. Garrison and Edgar E. Willis. *Television and Radio*. (Prentice-Hall, Inc.), 1978, 543 p.

Baran, Stanley J. and Dennis K. Davis. *Mass Communication Theory[—] Foundations, Ferment and Future*. (Wadsworth Publishing Company), 1995, 407 p.

3. 社会運動分野

Hoffer, Eric. *The Passionate State of Mind*. (Harper & Row, Publishers), 1954, 151 p.

Bennis, Warren G, Kenneth D. Benne, Robert Chin and Kenneth E. Corey. *The Planning of Change*. (Holt, Rinehart and Winston, Inc), 1961, 517 p.

Toch, Hans. *The Social Psychology of Social MOVEMENTS*. (The Bobbs-Merrill Company, Inc.), 1965, 257 p.

McLaughlin, Barry. *Studies in Social Movements*. (The Free Press), 1969, 497 p.

Bowers, John Waite and Donovan J. Ochs. *The Rhetoric of Agitation and Control*. (Addison-Wesley Publishing Company, Inc.), 1971, 152 p.

Hornstein, Harvey A, Barbara Benedict Bunker, W. Warner Burke, Marion Gindes and Roy J. Lewicki. *Social Intervention*. (The Free Press), 1971, 597 p.

Simons, Herbert W. *Persuasion : Understanding, Practice, and Analysis*. (Addison-Wesley Publishing Company, Inc.), 1976, 382 p.

Cooney, Robert and Helen Michalowski (eds.). *Active Nonviolence in the United States* [—] *The Power of the People*. (Cooperatively Published), 1977, 240 p.

Stewart, Charles J. Craig, Allen Smith and Robert E. Denton, Jr. *Persuasion and Social Movements*. (Waveland Press, Inc.), 1984, 227 p. Second edition, 1989, 321 p.

#### 4. 政治コミュニケーション分野

Kingdon, John W. *Congressmen's Voting Decisions*. (Harper & Row, Publishers), 1973, 313 p.

Chaffee, Steven H. (ed.), *Political Communication* [—] *Issues and Strategies for Research*. (Sage Publications), 1975, 319 p.

Agranoff, Robert. *The New Style in Election Campaigns*. (Holbrook Press, Inc.), 1976, 471 p.

Nimmo, Dan. *Political Communication and Public Opinion in America*. (Goodyear Publishing Company), 1978, 465 p.

#### 5. その他

Peterson, Houston (ed.). *A Treasury of the World's Great Speeches*. (Simon and Schuster, Inc.), 1954, 866 p.

Arnold, Carroll C., Douglas Ehringer and John Gerber. *The speaker's resource book an anthology, handbook, and glossary*. (Scott, Foresman and Company), 1966, — p.

その他, 前稿, (2)「ミネソタ大学(大学院を書き忘れ)スピーチ・演劇学科へ」に記載したスコット先生からの贈り物の書名をご参考のこと。

マーティン先生の諸授業内容については、『論集』第56号, 339-375頁で紹介した「ミシガン大学社会学部における“社会変革”の講座に出席して」(チェスラー先生の授業)のように, まとまった小論か一冊の本が書けるほど, 多くの貴重なものであった。この項では, エッセンスだけを列挙しておく。

次表のように, アメリカ言論史の第一回授業で配布された学習計画表の一部分だけを例にとってみても, 資料や参考図書の学内所在場所まで, 親切極まりなく印刷されている。

このリストに従って一学期を終了すると, 次の弁論家たちがどのようにアメリカ社会を操作して歴史を創ってきたかが自らわかる。以下の人物をコミュニケーションの視点で, 一人ずつ学ばされた結果, 先生から離れたこの30年ほどの間に, 目立った活動をしたパブリック・スピーカーたちについて研究できる自分になっている。

これら一人々々の言論活動の分析方法の一例として、この項の最初に紹介してあるマーティン先生の共著 *Speech Communication* →→→ *Analysis and Readings* が大いに役にたつが、この本を1979年に先生からいただく20年前に（既出、前稿「論集」No. 117 p. 129）、スコット先生の「説得法——Persuasion」の授業で使用した“Brembeck and Howell”の本が脳裡にすでに刻み込まれていた。

AMERICAN PUBLIC ADDRESS Speech 4.13 Win'er, 1977/8

Note: Good, cheap anthologies of American addresses are mostly out-of-print. If you could get your hands on Ernest Wraga and Bernet Baskerville, eds., AMERICAN FORUM, you'd find it useful. Otherwise, all assigned speeches will be on reserve at UGLI or in Speech Reading Room, 1516 Frieze Building. Four papers, produced at intervals, will add up to a term paper representing progressive investigation of a single topic.

Week of January 2  
 F Introductory: the study of American public address

Week of January 9  
 M Literary and rhetorical values in 17th century America  
 W The 'plain style' and its practitioners  
 F The sermon as a literary object  
 Project 1: Rhetorical biography, due Friday, January 27

READINGS: ✓John Cotton, "The Powring out of the Seven Vials," in Potter, ed, THE COLONIAL IDIOM, 363-376. SRR  
 ✓Solomon Stoddard, "The Defects of Preachers Reproved," in Potter, COLONIAL IDIOM, 430-442. SRR  
 ✓Jonathan Edwards, "God Glorified in Man's Dependence," in Jos. Blau, ed., AMERICAN PHILOSOPHICAL ADDRESSES. SRR  
 ✓Jonathan Edwards, "Sinners in the Hands of an Angry God," in Parrish and Hochmuth, eds., AMERICAN SPEECHES. SRR  
 George Whitefield, "Abraham's offering up his Son, Isaac," in Robt. Oliver, ed., SELECTED SPEECHES FROM AMERICAN HISTORY. SRR  
 ✓Gilbert Tennent, "The Danger of an Unconverted Ministry," in Potter, ed., COLONIAL IDIOM, 469-486. SRR

*Desert Argument*  
*Abel's strategy: ousting*  
*affairs desired*  
*with's, Tannen*  
*what*  
*TO WITHIN*  
*upland side,*  
*proccogation.*

Seminar in American Public Address  
Dr. Howard H. Martin, 1977-78

Speakers to be covered:

John Cotton  
Solomon Stoddars  
Johnathan Edwards  
George Whitefield  
Gilbert Tennet  
Johnathan Mayhew  
John Hancock  
David Daggett  
Patrick Henry  
James Madison  
Thomas Jefferson  
William E. Channing  
Daniel Webster  
John C. C Calhoun  
Ralph Waldo Emerson  
Robert L. Toombs  
Wm. L. Garrison  
Frederick Douglass  
Wendell Phillips  
Susan B. Anthony  
Joseph E. Brown  
Emmeline Pankhurst  
Charles Sprague  
Abraham Lincoln  
Steven A. Douglas  
Henry W. Grady  
Booker T. Washington  
Thomas H. Huxley  
Henry George  
Wm. G. Sumner  
Washington Gladden  
Russell H. Conwell  
Albert J. Veberidge  
Wm. Jennings Bryan  
Joseph Chamberlain  
W. E. B. DuBois  
Emma Goldman

Theodore Roosevelt  
Woodrow Wilson  
Warren G. Harding  
Clarence Darrow  
Marcus Gravey  
Calvin Coolidge  
Alfred E. Smith  
Franklin D. Roosevelt  
Charles E. Coughlin  
Huey P. Long  
Harry S. Truman  
James G. Byrnes  
Arthur Venderberg  
Winston Churchill  
Joseph McCarthy  
Adlai Stevenson  
Richard M. Nixon  
John F. Kennedy  
Martin Luther King, Jr.  
Roy Wilkins  
Stokely Carmichael  
Malcomm X  
Mario Savio  
Spiro Agnew  
George McGovern  
Abba Eban  
Ford  
The 1980's  
The 1990's  
The 2000's  
Carter  
Reagan  
Bush  
Clinton  
Wallace  
Bush  
Kerry

(以下、復習者各人が追加すること。)

↓

## GREAT SPEECHES

A collection of highlights from historic speeches  
From last fifty years.

Abridged Edition / copyright 1990 The Educational Video Group.

Franklin D. Roosevelt	-----	<i>First Inaugural</i>	( 8:44)
Adolph Hitler	-----	<i>1934 Nazi Party Keynote</i>	( 5:18)
Winston Churchill	-----	<i>Two Wartime Speeches</i>	( 4:13)
Franklin D. Roosevelt	-----	<i>Declaration of War</i>	( 5:08)
Douglas MacArthur	-----	<i>Farewell Address</i>	( 9:40)
Richard Nixon	-----	<i>"Checkers Speech"</i>	( 18:14)
Dwight D. Eisenhower	-----	<i>"Atoms for Peace"</i>	( 7:17)
Golda Meir	-----	<i>"Peace in the Middle East"</i>	( 8:20)
John F. Kennedy	-----	<i>Inaugural Address</i>	( 12:12)
Adlai Stevenson	-----	<i>Cuban Missile Crisis</i>	( 7:28)
Martin Luther King Jr.	----	<i>"I have a Dream"</i>	( 8:30)
Lyndon B. Johnson	-----	<i>1965 Voting Right Act</i>	( 10:54)
Barbara Jordan	-----	<i>Statement on Impeachment</i>	( 8:20)
Richard Nixon	-----	<i>"Watergate Speech"</i>	( 7:28)
Ronald Reagan	-----	<i>1980 Presidential Acceptance</i>	( 6:57)
Mario Cuomo	-----	<i>1984 Democratic Keynote</i>	( 4:34)
Jesse Jackson	-----	<i>Rainbow Coalition</i>	( 6:18)
Geraldine Ferraro	-----	<i>Vice-Presidential Acceptance</i>	( 3:11)
Ronald Reagan	-----	<i>Tribute to the Challenger Astronauts</i>	( 3:11)
(Total playing time of video 146:40)			
Narrator/Edward Rochling			

☆ 本校 AV ルーム所蔵。野村啓治先生を通して得た資料。野村先生は本校に徳座が着任した1971年度の第一回ゼミ生であり、卒業後、ウィスコンシン大学大学院でWinston Lamont Brembech教授の下でSpeech学の修士コースを修めた。現在、本校専任助教授。なお、Brembech教授とミネソタ大学スピーチ学科のWilliam Smiley Howell教授との共著 *Persuasion: A Means of Social Control*. (N. Y.: Prentice-Hall), 1952, 488p. は有名。

「論集」第 58 号に、いわゆる Great Speakers をはじめ、日常生活全般で上手に他者を説得し、知らないうちの自分のペースに引き込む人は、どのような順序で相手を説得するかを、「説得目的別にみた論旨の展開法」として下記の表にして紹介した。

簡単に言えば、大演説でも、商売でも、父母との会話でも、教師と学生間の対話でも、友人同士電話をかける場合でも、いかにして相手を自分の立場にひきこむか、の順序をおしえてくれる表である。次頁の表をご参考。

それでは、目的に応じて、どのような例を用いると効果があがるか、このトリックも、同じ『論集』第 58 号、22～43 頁に「説得のための道具」の見出しで、訳して紹介しておいた。

スコット先生も、マーティン先生と同様の手引き書を、後年訪問した時に下さっている。  
(*The Speaker's Reader : Concept in Communication Form* [,] *Substance* [,] *Strategy* [,] *Style* [,] [*and*] *Tone* [,] by Robert L. Scott, (Foresman), 1969, 268 p.)

なによりも、社会運動の言論についての研究方法を教えてくださいましたマーティン先生やチェスラー先生に出会えたことは、まるで奇蹟のようであった。適切な指導をして下された。ベトナム反戦運動が、東海岸、中西部、西海岸の大都市の諸大学に拡大し、ミシガン大学ではげしい学生運動を体験した先生方だったからかもしれない。

134 頁の表は、別の機会に詳しくご説明したいが、私がマーティン先生に出会う 2、3 年前の 1970 年代半ば (1974 年?) に、おつくりになったもので、授業で配られた。





Martin 1974 [?]

TYPES OF SOCIAL MOVEMENTS

Type	SOCIAL CHANGE AIMS	INTERACTION W SOCIETY	IDEOLOGY	NEEDS MET FOR MEMBERS	LEADERSHIP FUNCTION	LIFE CYCLE	EXAMPLES
Affiliative	No change	Rhetorical: proselyting	None	Belonging	Facilitate	Stable	Fraternity
Self-help	Actual individual change	Rhetorical: proselyting	Group aid necessary	Safety, self-preservation	Facilitate	Stable	AA, WW, MLA
Status	Perception of indiv. Change	Rhetorical: proselyting	Exclusivity Myths	Self-esteem	Facilitate	Stable	DAR, Masons
Educational	Effective status quo	Rhetorical: reinforce & activate	Status quo	Cognitive, self-actual	Facilitate & organize	Stable	ACLU, LWV, NCEC
Reformist	Encourage social change	Rhetorical coercive: & reinforce, convert	Status quo plus	Safety, cognitive, self-actual	Facilitate, organize & address	Genesis-decay	Abolition, women's right
Resistance	Block social change	Rhetorical & coercive: reinforce & convert	Status quo minus	Safety, cognitive, self-actual	Facilitate, organize & address	Genesis-decay	KKK, JBS, HA, AIP, NRA
Revolution	Supplant social order & leaders	Rhetorical & coercive: reinforce & convert	Redistribution of power & property	Safety, self-actual.; cognitive	Facilitate, organize & address	Genesis-decay; Suppression	Chinese, Frs, Russian, US
Escapist	Exemption from social order & leaders	Rhetorical: proselyting	Millionarian fulfillment	Safety, self-actualization	Facilitate	Genesis-decay; suppression; frustration	UNIA, Black Muslims, AmI
Anarchist	Obliteration of social restraints	Rhetorical & coercive: conversion destruction	Individualism	Self-actualization	None	Episodic	Weathermen, IWW

## 5. 博士資格試験

1979年3月にミシガン大学大学院コミュニケーション学研究科博士課程の単位を取得し、博士号資格の筆記試験も口答試験も無事に合格した。1988年6月6日には、コミュニケーション学研究科博士論文審査に合格し、口頭・面接試験にも合格。そして同じ年の8月19日にはスピーチ学博士の学位を取得。博士論文は「日本におけるフェミニスト運動の台頭」という題で、コミュニケーション学の視点から平塚らいてう、市川房枝、奥むめを、山川菊枝、特にこれまで日本語でも英語でも学術的に紹介されていなかった奥むめを中心に、過年100年にわたる日本における女性による政治・社会改良運動の流れを英語で紹介し、母校の慶応義塾大学出版会から一冊の本として1999年4月に出版した。

老婆心から、学位問題について一言。大学によって異なるであろうが、前述したような博士資格筆記・口頭／述試験が無事終了すると、以下のような“Candidacy”の免状を受ける。多くの人々は、これをもって自分は博士になったと言う。

次に、期間内に論文を書き、その内容審査と面接を受ける。時期は、ミシガン大学の場合(他大学もそうであろうが) candidate自身が設定する。自分のadvisorの他に主選考分野からX人(私の場合2人)、副選考からXX人(1人)、この中には国内・外を旅行中、長・短期の滞在中の先生もおいでになるかもしれない。Candidate自身がこれらの審査員たちを招集する。「その能力も博士資格に入る」と習った。

このような設定を行うために、日本から二度アン・アーバーに行った。恩人シェー先生は、相手方が私に不便／不利益な取り決めなどをする事があれば、貴女は、そしてもう先生方と同格なのだから、“Gentlemen,”と言ってしっかりと交渉しなさい、と長距離電話で助言して下さい。そのようなことを起こす先生方ではなかったが。

チェスラー先生はもう日本から来ないで、遠隔テレビ・インタビューをしてはと助言された。そのようなsituationは全く慣れていなかったので、お断りした。面接委員会(Doctoral Committee)にはマーティン先生、コルバーン先生、チェスラー先生に加えて、2年ほど前に、私たち大学院博士コースの学生たちを加えて就職面接試験をした、若いアフリカ系アメリカ人のRichard Allen先生が入って下さった。

東京経済大学6号館ゼミ教室の2倍弱の部屋で、40人分の椅子がおける大きなテーブルがあり、その一辺に小さな私が座らせて、論文の内容について質問を受ける。異文化なので、私はどのくらいの長さの論文にしてよいかわからなかったので、(英文)3000頁ぐらいのものを書きあげてあったが、日本が異文化である先生方は、ご自分たちがわかる箇所だけを選ばれたので、面接当日までには400頁ほどのものになっていた。しかも、各章で自分たちにわかりやすい部分だけを残すことになり、結果、各章の長さは極端に不均衡になってし

まっていた。そのような最終原稿から、質問を受け応答する二時間ほどのときが経った。次いで、一人だけ室外に出され、間もなく Committee Chairperson のマーティン先生に呼び入れられ、合格となった。おめでとう、ありがとうございますの握手をして、フランスに長期滞在中のシェー先生に電話をして、東京に戻った。

1977 年秋、学友は 6 人だったが、私の知る限りでは 4 人ほどがすでに博士になっていて、私が一番さいごであった。学友の一人は、韓国に帰り、現在韓国のコミュニケーション学会会長になっている。

東京に帰ると、追うように、Dr. George T. Shea からエマソンの次のことばのカードが贈られてきた。1956 年以來すでに半世紀にわたって、一留学生の米国の大学との係わりの学究生活を、さいごまで客観的な姿勢で支えつづけて下さった。他国からの留学生を、このように支えている日本人は極めて少ない。

## Success

*To laugh often and much ;  
to win the respect of intelligent people  
and affection of children ; to earn the  
appreciation of honest critics and  
endure the betrayal of false friends ;  
to appreciate beauty, to find the best  
in others ; to leave the world a bit  
better, whether by a healthy child,  
a garden patch or a redeemed  
social condition ; to know even  
one life has breathed easier because  
you have lived. This is to have  
succeeded.* — Ralph Waldo Emerson

すでにお伝えしたように、私の博士論文の理論上の枠組は、マーティン先生が助力して下さった。推めて下さったのは、Stewart, Charles, Craig Smith and Robert E. Denton, Jr. *Persuasion and Social Movements*. (Waveland Hights : Illinois, 1984), 217 p.

であった。加えて、かつて港湾労働者(?)だった Eric Hoffer や Hance Toch (トッホ) の本(既出)からの「社会運動」の定義や発展段階—ある人が外的世界の何かについてヘンダと感じ、何かしなくてはならないと、意識変革が自分の中で起こる→それを一人の人に伝え→3人~6人と同調者を集めていく。その人たちのなかに、筆がたつ人、口が達者な人、場所や時間があり、経済的援助をしてくれる人々が自然に集まってくる→社会変革のための自分たちの目的/目標をかかげ、20人、30人と、もっと多くの人々によびかけ、活動を組織化していく。そのうちにボスができ、内部分裂が起きたり、外から圧力がかけられてくる。中心となる人(々)がしっかりしていなければ、次第に組織化されてきたその運動は、目的達成までに内部分裂したり、外圧でつぶされたりする。幸いに目的を達成したら、解散する。そうでなく、同じメンバーで固まってしまうと、自分たち自身が圧力団体と化す。

このような運動の発展段階、種類、等々を上記の表、本、多くの例から学んでいった。

1977年には、スコット先生の研究室で上記 Stewart, Craig and Denton, Jr. の本の第二版、(1989, 321 p.)を下さった。1997年には、私の博士論文“Oku Mumeo and the Efforts to Alter the Status of Women in Japan from the Taishō Period to the Present”(1988)の理論上の枠組みのために、マーティン先生のお推めで、すでに使いこなしの本なのにといいながら飛行機の中でカバーを開くと、

Perhaps you will find this  
copy useful, Akiko,

R. L. Scott

August, 28, 1997

と書いて下っていた。先生のご指導から離れて30年以上も経っているのに、的確に私のneedsをとらえ、与えて下さる。何という思いやりの深い方だろう、と感心した。附言するが、上記の私の学位論文の題は、マーティン先生がつけてくださった。

このように、マーティン先生からアメリカ言論史と政治・社会改良のコミュニケーション諸論、異文化コミュニケーション、国際コミュニケーションなどの手ほどきを受け、すべてが私の博士論文へと具体化されていった。ここまで筆をはしらせ終わったとき、マーティン先生から以下の近況報告が届いた。

ケリー対ブッシュ TV 討論日である。先生は、ご退職以来美術館の docent をしておいでになる。私の住む世田谷の美術館の展示物について二頁にわたる記事が *Art and Antiques*, 2000年2月号に載っていたと、コピーを同封して下さった。かつて、ミネアポリス在住時のシェー先生も美術館をもっておいでになり、「N. Y. C. とロスアンジェルスの間には、日本の美術を紹介する専門の美術館がない。日本の屏風展をしたいので……」と協力を求めてこ

られた。

October 9, 2004

Dear Akiko-----

Looking through some older issues of ART & ANTIQUES I came across this article about the Setagaya Art Museum--which, I suppose, is in your neighborhood. It sounds like an interesting place with interesting collections. Have you ever been there?

We have had exhibits at the UM Museum of Art of Japanese textiles--Fishermen's coats from some western islands of Japan, many ukiyo-e woodblock prints from our own collection, and, recently, a beautiful three panel screen with an image from THE TALE OF GENJI,--Genji sees Murasaka for the first time. The school children who come to the Museum love the Tea House and the tea ceremony (in brief). I wish that we had a tea bowl to use on tours as lovely as the one pictured.

I'm still serving as a docent at the Museum, but I will probably give it up in a year or so--when I'll be 80! I've truly enjoyed working with the school kids and will miss the stimulation of preparation, and priming the kids...

Today is homecoming football game at Michigan, so we stay FAR FAR away from the stadium area. Apparently, the roads leading to Ann Arbor are already jammed with traffic.

Hope all's well with you--Lila sends her regards as well,

Best wishes to you,



Howard Martin

# The University of Michigan

Horace H. Rackham School of Graduate Studies

Certifies that

AKIKO TOKUZA

has satisfactorily completed all requirements for admission to candidacy for the  
doctorate and is therefore a

**Candidate in Philosophy**

Communication

*Alfred S. Pissinatti*  
Dean

Winter 1981

*Harold T. Shapiro*  
President

# The University of Michigan

to all who may read these letters, Greetings:

Hereby it is certified that upon the recommendation of

The Horace H. Rackham School of Graduate Studies

The Regents of The University of Michigan have conferred upon

**Akiko Tokuza**

in recognition of the satisfactory fulfillment of the prescribed  
requirements the degree of

**Doctor of Philosophy**

(Speech)

with all the rights, privileges, and honors thereto pertaining  
here and elsewhere.

Dated at Ann Arbor, Michigan this nineteenth  
day of August, nineteen hundred and eighty-eight



*R. W. Flannery*  
Interim President  
*R. J. Kennedy*  
Secretary

## 6. 忘れえぬ人びと

岩崎良三先生は、1951年、私の英文学科入学試験時の面接担当をして下さった。アンガー先生とほぼ同じ年齢でいらっしやった。ロバートP・ウォレン氏より三歳年した。国内ではあったが軍隊生活も経験されておいでらしかった。静かな、温和な、黙って、あたたかく、子供たちを観察している慈父のような方であった。(既出 前稿「人文自然科学論集」No. 117.)

帰国直後、エレベーターがまだついていなかった三田の山の校舎、六階のL.L. 教室まで私をお連れになり、係りの先生に職はないかときいてくださった。東経大L.L. 授業を担当して下さい立教大学の後藤昭次先生から東京経済大学ではL.L. 授業専任担当者を求めているとお知らせをきいて、そのおはなしをすすめるに当り、私を推薦する手紙を書いて下さいと先生にご依頼したところ、履歴書をみればわかります、と言いなさい。若いから業績はまだないが、と、二回にわたり言い放たれた。三回目に、「貴台におかれましては、云々……」と、見事な日本語であった。東経大就任第一学期には、立川在の甥を私の講義の聴講生として出席させて下さった。国分寺駅前の殿ヶ谷戸公園もご親戚のものだったらしい。

それから25年後。東京経済大学コミュニケーション学部創設に当って、対文部省への推薦状を書いて下さるとしたら、その後の私をどのように評価して下さいであろうか。

奥様に先立たれた先生をおたづねした時に、「エフェソス(Ephesus)に行きました」とボツンとおっしゃった。その後、先生の形見として、本をどうぞとご息がおっしゃったので、大きな、厚く重い辞書二巻をいただいた。これは、オコーナー先生のクラスで習った文学者・批評家が書きおろした、ことばの辞書であった。岩崎先生は、すでにお持ちだったのかと感服した。ラテン文学研究者でもある先生は、エズラ・パウンドの研究にも特にご造詣が深く、三田山上のお家の書齋で、関西から教えを乞いにいらした若手パウンド研究者にお目にかかったことがある。その人は、偶然母のかつての先生のご息だったので、その二巻は岩崎先生の形見にいただいた。

1963年初夏、帰国直後から、母校慶応義塾外国語学校(外語)で英語のクラスを担当させて頂きいただいた。そのキッカケを、つくって下さったのは、学部時代のクラスメート、仏文科卒業の樫部多枝子(現在 石川)さんである。外語で事務のお手伝いをしておいでだった。今でも感謝の気持ちでいっぱいである。

わたくしたちは、戦後わずか5、6年の慶大キャンパスを選び、白井浩司、佐藤 朔、井筒俊彦先生方や、鈴木力衛先生のフランス語文法、青柳瑞穂の『水の上』、白井健三郎「アポリネールの詩」、の必須授業、母までも京都時代に影響を直接受けた成瀬無極先生、後藤末雄先



生や鈴木新太郎先生の『若きバルク』の授業に、三田の山へ日参した。フランスから帰国直後の遠藤周作氏も夫人となる叡子氏と妹君も、同じ教室の空気を吸った。控えめな方であったが、その頃の雰囲気我代表する樫部さんには、今も暖かく見守られている気がする。

帰国直後、私の両親とかかわりのある同志社大学を出られた高橋源次先生を明治学院大学学長室に白百合の花一輪をもっておたずねした。日本におけるヘンリー・D・ソロー (H. D. Thoreau) 研究の現状を調べる過程で、ダンテやブレイク (William Blake)、チェスタートン (Gilvert Keith)、エマソンなどの研究の第一人者寿岳文章先生も立教大学の杉木 喬先生も、私の研究の日本での活かし方についてお心をくだいて下さった。先生は日本におけるアメリカ文学研究の種まきをなさった。

次稿では、1960・70・80年代にアメリカの大学で学んできたコミュニケーション学の基礎学的一端を紹介する。本校では、多くの配布資料を用いて1992-2003学年度に学生諸君とまとめていった。

(2005年4月記)

